

1 親子の居場所事業

目指す拠点の姿	(参考)3期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①利用者を温かく迎え入れる雰囲気のある場になっている。	<b>【課題】</b> ●子育て支援の場に出向かない層のニーズやその理由を把握し、誰もが訪れやすい拠点運営を、拠点と区で協力して検討していく。コロナ禍の中で、オンライン配信等の設備とスキルが整い、ニーズが高いテーマでのワークタイムの開催等を検討し、来所しない層にも多様な機会を届ける工夫をする。 ●就労、早期に職場復帰する人が増える中、親子が地域の中で育てられ、支えられる体験の機会を積み重ねられるよう、妊娠期からのニーズを把握し、多様な時間設定を工夫する。 ●プレ幼稚園入園、就労層の増加により、きょうだい児を連れながらの拠点長期利用者が、減少傾向にある。場を支え、人や地域を繋ぐこの層との、丁寧なコミュニケーションの持続と新たな取り組みを行うと共に、仕事と地域活動の両立による自分自身の変容を覚知する当事者からの発信拡散等を促す工夫をする。 ●産前からの切れ目ない支援に向けて、横浜型市版子育て世代包括支援センターとして、区と連携し、予防機能の役割を担っていく。 ●拠点サテライトが地域の拠点、居場所として機能するように取り組む。	A	A
②多様な世代、性別等の養育者と子どもが訪れる場になっている。		A	A
③養育者と子どものニーズ把握の場になっている。		A	A
④親(養育者)自身が親として育ち、また子どもが育つ場となっている。		A	A
☆様々な地域の区民が拠点を利用している		A	A

評価の理由(法人)

(主なデータ)

■利用者数

(人)

	R3年度	R4年度	R5年度
東神奈川	19,690	22,089	23,267
サテライト	13,354	16,245	17,339
出張ひろば: 沢渡	1,755	1,762	1,656
出張ひろば: 羽沢	1,708	1,861	1,612
合計	36,507	41,957	43,874
アウトリーチ※	3,574	5,612	6,569
父親	1,710	2,051	2,210
ブレパパ・プレママ	142	229	291
支援者	2,058	2,745	3,506

※ひろば人数には含まれていない

■妊娠期向けプログラム(上段:回数/下段:人数)

	R4-5年度
産後のくらし体験版	30
	364
保育・教育コンシェルジュ&見学、 マタニティヨガ、お話し等	12
	69
かなさんぽ、カフェトーク※	13
	214

※産後の人も参加

■令和5年度

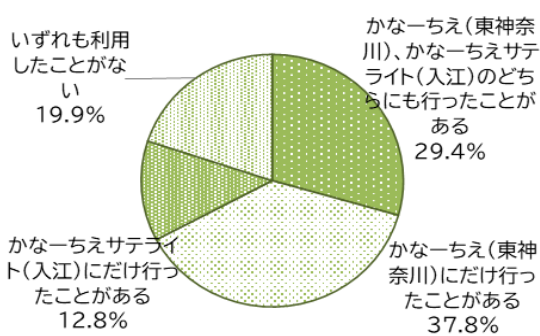
(上段:回数/下段:人数)

	東神奈川	サテライト
療育おやこ&うちの子気 になるトーク	11 65	12 37
国際交流トーク	9 45	2 13
双子三つ子トーク	11 18	5 18
きょうだい児トーク	- -	3 19
アラウンド40トーク	5 43	- -
10代20代トーク	6 38	1 5
カウンセラーと みんなでトーク	12 34	12 52
パパたちの 子育てトーク	6 66	- -
ベテラン保育士と みんなでトーク	7 37	- -
パパと赤ちゃんの ふれあい遊び	4 39	- -
父と子の遊びタイム	- -	12 285
初めまして赤ちゃん プログラム(連続)	24 284	24 262
親子ふれあい遊び (赤ちゃん編)	11 436	11 210
2-3歳児集まれ~パワー 全開新聞紙遊び	5 139	6 197
その他(小学生・ 私たちの町トーク等)	5 28	4 58

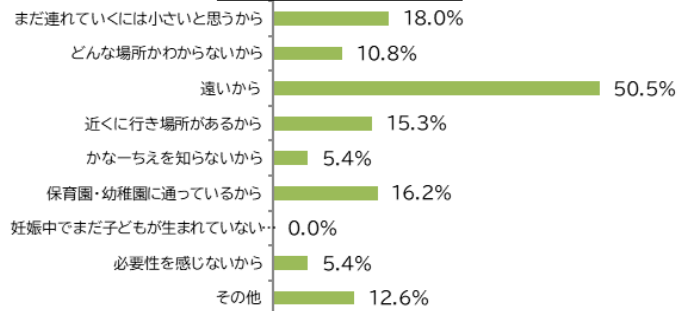
■令和5年度 神奈川区実施

「かな一ちえ」に関するアンケートより (回答619件)

Q8 かな一ちえを利用したことは  
ありますか？



「いずれも利用したことがない」と回答した方は  
理由を教えてください



その他n=11の内訳  
駐車場がない…4 緊張する…2 など

★ お子さんが産まれてから、妊娠中に知っていたら  
よかったと思うことは何ですか(自由記載194)  
・かな一ちえについて 37  
・存在を知りたかった  
・妊娠中に行けることを知らなかった

## **1 妊娠期から幼児期までの子どもの育ちを見直し、多様な人達と出会い、見守りあう経験を積み重ねる、親の姿容の場**

- コロナ禍からアフターコロナ期の乳幼児親子の孤立感解消と、精神的支援、繋がり創出へと、拠点の多機能を連動させて対応した。居場所においては、親子間のコミュニケーション、親同士、子ども同士の交流の機会が少なくなったことから、ふれあいや遊び、コミュニケーション等をプログラムに反映し、日々のひろばでも体験や交流につながるようスタッフがはたらきかけた。
- 様々な対話型プログラムを展開する中で、20代親の対話タイムが復活し、当事者による活動が活発になった。大型事業や日常のひろばで、当事者企画や情報交換が行われるようになった。
- 発達に心配をもつ親子の対話タイムを長年支えてきた当事者がスタッフとなり、発達に心配を抱える親子の悩みを日常のひろばの中で支えた。
- 父親達と話し合いながら、土曜日を中心に父子むけ事業を展開した。利用層の広がりがあり、平日の父利用も増えている。
- 学生実習や、多様な世代の地域ボランティアが増え、大型事業には多団体が参加するなど、世代を越えた人との交流が活発になった。小学生親子ボランティアは、幼児の利用が減り乳児の利用が増えている中、子ども同士の交流を生むきっかけにもなった。
- 来所のきっかけとなる低月齢親子向けのプログラムは、ニーズに応じて内容を変更しながら丁寧に寄り添い、子育て期のはじめの一歩をひろば全体でサポートした。
- 妊娠期から利用しやすいよう、区役所窓口での周知や、両親教室での紹介を工夫した。土曜日の体験型プログラム、交流をねらう平日プログラムへの参加に加えて、ひろばに立ち寄る妊娠期の人も増えている。

## **2 子育て家庭が地域とつながる機会を創出し、家庭の理解者や応援者を地域に広げていく**

- ひろばを利用しない親子や、妊娠中から地域とつながる機会として、新たに、地域の場をめぐる事業を展開した。子育て関係者や協力店舗と、一緒に地域の魅力を探り、町の中での親子との交流が生まれている。
- 中学校・高校での「親子とのふれあい授業」を3校で共催実施。交流・体験・ふり返りを通して、命や子育てについて、体感し合う機会となった。
- 地域との共催事業を日曜・祝日に設定することで、就労世帯の参加や、家族ぐるみで地域につながる機会を増やした。

## **3 区内全域の面的な子育て支援の展開**

- 令和2年度末に開設したサテライトは、子育て家庭の転出入が多い地域で、ニーズをとらえながら、アットホームな雰囲気のある戸建てに屋外スペースを設け、新たな居場所づくりを行った。地域との連携が強化され、公園への定期出張などで、面的な対応が進んでいる。
- 2か所の出張ひろば(沢渡三ツ沢地域ケアプラザ、羽沢長谷自治会館)は、地域密着型ひろばとして機能しながら、地域との連携で多世代交流の機会を生んでいる。新駅が開設された地域では、参画しているネットワークと共に新たな居住者にも対応していく。
- 区内全域で、地域ケアプラザ、地区センターと「子育て応援タイム」を年間で共催。地域と共に取り組むことで、地域ごとのニーズを内容に組み込み、外遊び事業も広がっている。

## **4 誰もが立ち寄ることができる、心地よく過ごせる環境を目指して**

- コロナ禍では、安心して過ごせるひろば整備を行いながら、利用者のニーズを丁寧に聞きとった。コロナ禍での出産・子育てをする家庭の機微に慎重に寄り添い、制限の中で出来ることをスタッフ間で話し合いを重ね、検討を繰り返し、居場所を継続した。
- 感染状況が落ち着いてからは、昼食タイムと飲食できるスペースを再開した。個々の家庭のペースで過ごしやすく、交流しやすい環境と声掛けを心がけた。ひろばのスペースの仕切りを低くし、子どもの育ちの先が見えるようにした。また、自由な遊びが生まれるよう、親子に働きかけた。
- 利用しにくさを感じている人に対して、居場所の過ごしやすさにつながるよう、アンケート調査結果や、第三者委員の聞き取り(2名、各月1回)、ひろばでの利用者からの声等をスタッフで共有し、対応に努めた。様々な親子の選択肢となるよう、より身近な区内の居場所を広く紹介した。
- 子どもの相対的貧困率が高まっている社会情勢の中、生活困窮に関する支援活動情報が、ひろばにも寄せられるようになった。必要な家庭が支援につながるサポート体制ができた。

評価の理由(区)

- ・令和5年度に、区と拠点で連携して、地域子育て支援拠点に関するアンケートを実施した。区では乳幼児健診受診者等、拠点では来所者を対象にアンケートをとることにより、拠点利用者と非利用者の双方のニーズを把握し、区と拠点で共有した。
- ・妊娠中から拠点を利用してもらうことを目的に、土曜日両親教室(基本的に、妊婦及びそのパートナーが参加)で拠点職員がPRを行い、拠点がやっている沐浴体験への参加や妊娠中からの拠点利用を促した。
- ・保育所の利用を希望する保護者が多いことから、区の保育コンシェルジュが拠点に出向き、保育所等へのこのものの預け方について、対面とオンラインで伝える機会を作った。
- ・様々な背景を持つ子育て世帯が拠点を利用できるよう、区職員が拠点へ同行しひろば利用、相談利用へもつなげた。
- ・区の保健師が、拠点全体会への参加時や、拠点及びサテライトへの訪問時に、拠点スタッフと共に室内環境、遊具の安全点検をした。また、安全点検結果について、全体会や拠点スタッフ会議で話し合いをもった。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- 新設サテライトひろばは、子育て支援者事業、こんにちは赤ちゃん訪問事業、福祉保健センターこども家庭支援課と連携することで、地域との関係づくり、子育て家庭の居場所としての定着が進んだ。地域密着の居場所として、転入家庭や父親、新たな層の利用につながった。
- 子育て世代包括支援センターとして、区と拠点が連携し、妊娠期への支援を都度見直し、体験型プログラムや、ひろば親子との交流を中心に、互いの強みを活かして機能した。
- 社会の動き、子育て家庭の生活スタイルの変化や個別ニーズにアンテナを張り、アウトリーチや事業に反映した。
- コロナ禍を経て、身近な場の大切さ、支え合うことの必要、対面の効果など、居場所の価値を再認識する機会ともなった。利用者や支援者のニーズと状況を見極めながらの対応、スタッフ間での対話と検討を重ねたことで、居場所としてのチーム力が高まった。

(課題)

- 子育ての社会化が一般化し、早期から保育園等を利用する流れが生まれている。社会の動きをつかみながら、子育て支援の役割等の検討を市・区、18区と共に進めていく。
- 国の施策が転換期を迎え、子ども真ん中社会において、子育て支援の現場では、より幅広い柔軟な対応が求められる。居場所としての機能を高めながら、関係機関とのネットワークの中でできることを探っていく。
- 居場所利用の期間が短くなっている中、その先を見通し、親以外の他人との出会いを親と共に見守り、子どもの育ちを考える機会をつくっていく。
- 子育て世代包括支援センターとして、区と連携し予防的に機能する役割を担う。妊娠期に必要な情報が届きキャッチされるよう、区と共に取り組んでいく。

振り返りの視点

- ア いつでも気軽に訪れることができ、安心して過ごせるような配慮、工夫をしているか。
- イ 居場所を訪れる様々な利用者(養育者、子ども、ボランティア等)の間に、交流が生まれるように工夫しているか。
- ウ 多様な養育者と子どもを受け入れる配慮や工夫をしているか。
- エ 養育者と子どものニーズを把握するための工夫をしているか。
- オ 把握されたニーズを区関係機関と共有し、ニーズに応じて必要な支援や新たな事業、事業の見直しにつなげているか。
- カ 子どもの年齢・月齢に応じた遊びの環境が整備されているか。
- キ 子ども同士の関わりが尊重され、子どもが健やかに育つために必要なことに養育者が気づき、学ぶ機会を提供する場となっているか。
- ク 養育者同士が相談、情報交換し、課題解決し合う仕組みや仕掛けがあるか。

2 子育て相談事業

目指す拠点の姿	(参考)3期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①養育者とスタッフとの間に安心して相談できる信頼関係ができ、気軽に相談ができる場となっている。	<p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●就労する養育者が年々増え、拠点を利用する期間が短くなっている中、当事者同士が相談し合える場や機会の工夫を引き続き設けていく。</li> <li>●多様な相談に対応するために、横浜市版子育て世代包括支援センター等と連携し、相談体制を面的に整えていく。</li> <li>●拠点内の連携をより深め、スタッフ研修を積み重ねていく。</li> </ul>	A	A
②相談を受け止め、内容に応じて、養育者を関係機関につなげている。また、必要に応じて継続したフォローができている。		A	A

評価の理由(法人)

(主なデータ)

■ひろば相談

※東神奈川は出張ひろば2カ所の人数含む

(上段:件数/下段:人数)

	R3年度	R4年度	R5年度
東神奈川	5,970	6,703	6,316
	3,850	3,906	3,700
サテライト	4,227	5,478	5,723
	2,306	2,852	3,225

※相談内容: 1位 生活、2位 親自身、3位 発育発達

■令和5年度専門相談

※東神奈川は出張ひろば2カ所の人数含む (人)

	東神奈川	サテライト
こどもの言葉とコミュニケーション	92	61
臨床心理士の子育て相談タイム	60	62
栄養士とみんなでトーク	106	77
女性の悩み何でも相談	22	16
カウンセラーとみんなでトーク	34	52
保育士とあれこれ トーク	37	
助産師とみんなで トーク		93
合計	351	361

■令和5年度アウトリーチ事業「情報と相談の出前」

	片倉うさぎ山 プレイパーク	白幡の森 プレイパーク	ポートサイド 公園	青空 サテライト 入江川公園
回数	11	12	7	9
人数	234	768	80	225

■令和5年度 神奈川区実施

「かなーちえ」に関するアンケートより (回答619件)

Q.3 子育てをするにあたり、悩んでいることや  
心配なことがありますか？

	件数	%
子どもの健康・成長発達	295	48.4%
子どもとの遊び方・過ごし方	277	45.4%
子どもの年齢にあった接し方・しつけ	323	53.0%
子どもの教育	203	33.3%
子どもの動画やテレビの視聴の付き合い方	199	32.6%
保育園・幼稚園の入園に関すること	159	26.1%
配偶者(パートナー)との子育ての分担	77	12.6%
配偶者(パートナー)との子育ての考え方の違い	66	10.8%
家族・親族との関係	38	6.2%
家族の健康	49	8.0%
家族以外の人間関係	25	4.1%
自分自身の気持ち	68	11.1%
自分の健康	78	12.8%
経済的な問題	83	13.6%
仕事との両立	211	34.6%
介護との両立	14	2.3%
特になし	18	3.0%
その他	13	2.1%

■プログラムの内、相談に繋がるもの ※印は新規

専門相談	・臨床心理士・言語聴覚士 ・栄養士・助産師
当事者によるトーク	・アラ40才 ・ 10代20代 ・シングル親 ・ 双子三つ子 ・たぶんかおしゃべり会 ・療育おやこ ・ ダブルケア ・小学校生活 ・ 2,3歳児集まれ ・イヤイヤ期どうしてる？ ・ワーキング親
パパ向けプログラム	・パパたちの子育てトーク ・初めまして赤ちゃんプログラム (4回/年)※ ・父と子の遊びタイム(赤ちゃん編)※
妊娠期対象プログラム	・エア沐浴 ・ かなさんぼ※ ・助産師トーク※ ・マタニティヨガ
産後3か月まで 対象プログラム	・初めまして赤ちゃんプログラム (2回連続開催) ・産後ヨガ&トーク

Q.4 子育てに悩んだとき誰に相談していますか  
(相談するつもりですか)

	件数	%
配偶者(パートナー)	504	81.7%
子どもの祖父母	349	56.6%
友人	349	56.6%
子育て中の人	229	37.1%
近所(地域)の人	37	6.0%
かなーちえスタッフ	139	22.5%
かかりつけ医	82	13.3%
区役所の専門職 (保健師・助産師・社会福祉職等)	33	5.3%
子育て支援者	53	8.6%
かめっすスタッフ	16	2.6%
保育園・幼稚園の先生	109	17.7%
インターネットで相談	24	3.9%
特に相談する人はいない	11	1.8%
その他	24	3.9%

<p><b>1 気軽に立ち寄れる身近な場として養育者に寄り添い、当事者のプログラムや様々な相談に繋いだ。</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●当事者同士の対話の場を設け、支え合いながら、自身の体験や有益な情報を親同士が共有できる機会を作った。</li> <li>●発達が気になる子どものいる親対象のプログラムでは、経験者であるスタッフが、事業を担当するだけでなく、日常のひろばで親子に関わり、継続的に寄り添うことができた。</li> <li>●同じ年代や共通の悩みをテーマとした多様なプログラムを設定し、スタッフが進行役となることで参加者の声を拾い、事業に繋がっていく循環が生まれた。</li> </ul>
<p><b>2 多様化している社会で、相談プログラムを見直して選択肢を増やし、ニーズに対応した。</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●就労世帯の増加や拠点利用の期間が短くなっている親子に向け、土曜日に専門相談を実施した。平日は来所しやすい時間帯を検討し、午前午後と両方の時間を設定し、幅広い相談に繋がった。</li> <li>●父親がふれあい遊びをしながら家族相談士に相談できる、乳児の父親対象のプログラムを定期的に設けた。子どもを介して父同士の交流を深め、講師にも気軽に相談できる機会になった。</li> <li>●マタニティプログラムを定期開催し、妊娠期から先輩親やひろばと繋がるきっかけになった。そこから訪問型母子ケア事業に繋がるなど、産前産後の相談の入口となった。</li> <li>●スタッフ研修として外部講師やオンライン講座を活用し、多様な家族の相談に対応した。(発達支援、父親支援、LGBTQ+、精神保健福祉、面会交流、コロナ禍での虐待対応など)</li> </ul>
<p><b>3 定期的なアウトリーチの事業を通して、つながりにくい相談を掬い上げ繋げた。</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●コロナ禍での外出控えの中で、スタッフが公園に出向き、居場所に足を運べない養育者の不安や相談を掬い上げた。</li> <li>●「情報と相談の出前」では地域性を丁寧にリサーチした上で場を設定した。子育て家庭が孤立しやすいエリアに定期的に出向き、親子と出会い、何気ない会話から引き出される深い相談を受け止めた。必要に応じて利用者支援事業と連携しながら社会資源に繋いだ。</li> </ul>
<p align="center"><b>評価の理由(区)</b></p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・令和5年度に地域子育て支援拠点に関するアンケートを実施し対象者の相談ニーズを把握した。</li> <li>・毎月の定例会やかな一ちえ通信を通じて拠点で行われている様々な専門相談や当事者同士のミーティングの内容を具体的に把握した。</li> <li>・区役所の窓口や、家庭訪問・電話相談・赤ちゃん学級で対象者に合わせて拠点の相談事業を紹介しつなげた。</li> <li>・拠点の相談機能が充実するにつれ、深刻な相談を受けることが増えている。区や専門機関と連携し適切に引き継ぐスキルの向上について各会議で話し合い助言した。</li> <li>・拠点で受けた相談を、必要時、区役所職員も共有した。拠点の各会議で対応について助言したり、継続支援が必要と思われる相談に関しては拠点と連携した。</li> </ul>

<p align="center"><b>拠点事業としての成果と課題</b></p>
<p>(成果)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●新たな居場所として開設したサテライトひろばでは、丁寧な関わりを積み重ね、利用者とスタッフとの関係性を育みながら、ひろば相談や当事者同士の対話へとつなげた。利用者自らが相談を活用する体制が整った。</li> <li>●定期的なアウトリーチ先を増やし、相談に繋がりにくい養育者からの相談を掬い上げた。</li> <li>●様々なスタッフが自らの経験を生かし、多様な悩みを抱える養育者の気持ちを共感をもって受け止めた。</li> </ul> <p>(課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●多様な相談が増えている中、スタッフが連携しながら、人と人をつなぐ力、必要な機関につなげる力を高めていく必要がある。スタッフ研修やスーパーバイズを活用していく。</li> <li>●養育者が必要な時に自ら相談に繋がることができるよう、居場所や地域の場で、支え支えられる経験を持つような働きかけを引き続き行っていく。</li> </ul>

<p><b>振り返りの視点</b></p> <p>ア 養育者が相談しやすい仕組みづくりや工夫をしているか。</p> <p>イ どのような相談に対しても傾聴し、相手に寄り添う相談対応を行っているか。</p> <p>ウ 相談内容の傾向を把握し、振り返りを行い、望ましい対応の検討や共有に努めているか。</p> <p>エ 各種専門機関の役割を把握し、養育者への効果的な支援を行うための連携、連絡体制を作っているか。</p> <p>オ 専門的対応が必要と考えられる相談について、適切に対応しているか。</p> <p>カ 関係機関とつながった後にも、役割分担に応じて、継続的な関わりを持っているか。</p>
--

3 情報収集・提供事業

目指す拠点の姿	(参考)3期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①区内の子育てや子育て支援に関する情報が集約され、養育者や担い手に向けて提供されている。	<p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●SNS等による発信の工夫が求められる中、スタッフの意識と知識・スキルの向上を進める。</li> <li>●拠点利用期間が短くなっていく今、子育て期の早期から素早く情報を得られる仕組みを考える。</li> </ul>	B	B
②子育てや子育て支援に関する情報の集約・提供の拠点であることが、区民に認知されている。	<p>また、養育者自身の持つ力がその期間に発揮されるよう、機会や場の提供・効果的なネットワークづくりを進める。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●インターネット上でピンポイントで情報を得ることができる現在でも、相変わらずロコミの力は根強い。子どもが育つ地域の中で人の関わりからも、温かな活きた情報が届くよう、養育者の近くに存在する発信基地の環境づくりを継続する。</li> <li>●「地域別子育て情報カレンダー」の多様な情報が、より見やすく得やすいよう、利用者目線での記載・レイアウトの工夫の検討を重ねていく。</li> <li>●新型コロナウイルス感染拡大防止のため、オンラインによる事業を開催。子育て支援の場に出向かない親子や、就労家庭、妊娠期の人への新たなアプローチに繋がる。今後も、オンラインでの用途を学び、幅広い発信を工夫していく。</li> </ul>	A	A
③拠点の情報収集、発信の仕組みに、養育者や担い手が積極的に関わっている。		A	B



評価の理由(法人)

(主なデータ)

■かなーちえ通信: 隔月(年6回)発行 本拠点4,400部・サテライト3,400部印刷

: 配架場所270(区役所 地域ケアプラザ 地区センター他)

■地域別子育て情報カレンダー: 330セット、7地区別(地域ケアプラザごと)2,000枚作成

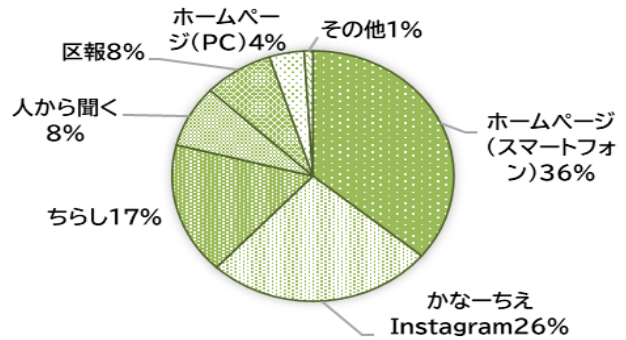
■地域別子育て情報カレンダー配布先

施設・団体	配布
かめっ子	47
親と子のつどいの広場	3
公共施設	21
地区センター、地域ケアプラザ、図書館、コミュニティハウス等	
区役所	5
福祉保健センター(保健師など)、区民活動支援センター、赤ちゃん訪問員等	
区内団体	6
区社会福祉協議会、地域活動ホーム、自主保育グループ、母子寡婦会等	
保育園 幼稚園	127
認可、小規模、横浜保育室、認可外、幼稚園、幼稚園協会	
民間	5
区内スポーツ関連施設、民間ひろば、商業施設、専門学校	

■令和5年度かなーちえ利用者アンケートより

- ①「子育ての知識・情報が増えた」と94%が回答
- ②「かなーちえの利用目的」情報が欲しいが第3位(36%)
- ③利用者の情報取得の方法内訳

かなーちえの情報はどうやって得ていますか？



■オンライン事業参加者

(上段:回数/下段:人数)

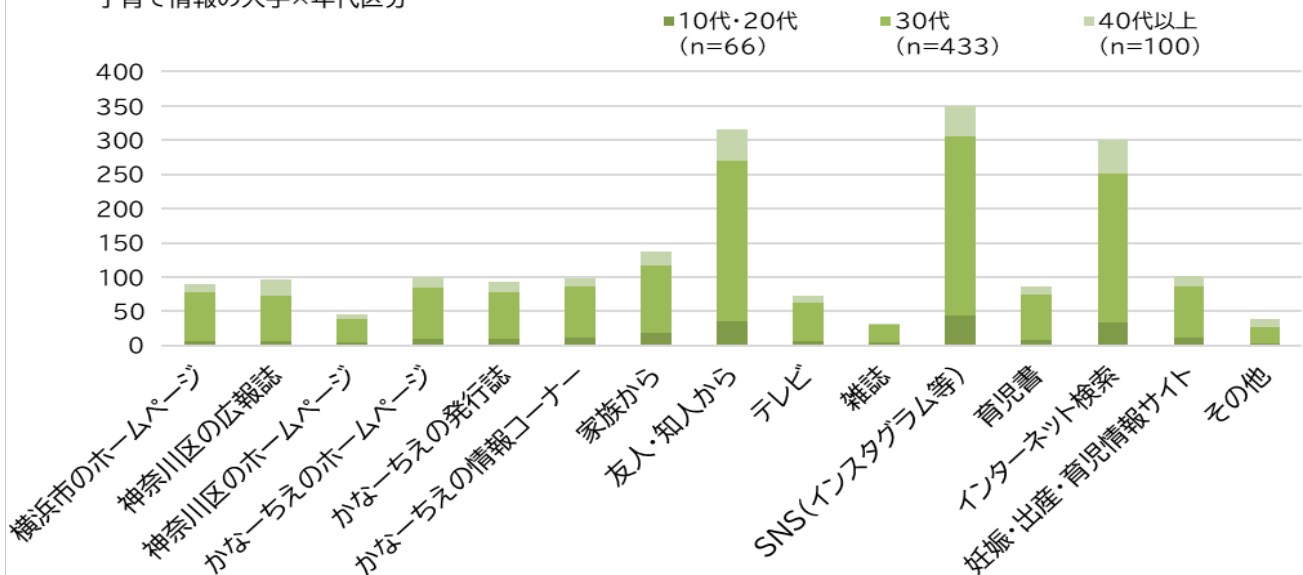
	R3年度	R4年度	R5年度
私流幼稚園えらび 100人いれば100通り	4 180	3 210	3 190
保育園のお話 基本のキ	5 161	3 165	3 184
オンラインおはなし会	3 120	3 80	1 32

■令和5年度 神奈川区実施

「かなーちえ」に関するアンケートより (回答619件)

Q1 日ごろの子育ての情報をどのようにして入手していますか？

子育て情報の入手×年代区分



### **1. オンラインを利用して、必要とする人に必要な情報が届く仕組みづくり**

- 横浜市は令和4年にDX戦略(令和6年4月改定)を策定、令和6年に「横浜市地域子育て支援拠点WEBサイト」稼働など、拠点においてもDXへの大きな転換期となった。システム導入に伴い、新スタッフの雇用、プロボノによるDX伴走、スタッフ研修(ICT利用時の個人情報保護)を行い、スタッフが安全・適切に情報を扱うための学びと共有を重ねた。
- コロナ禍にスタートしたオンライン事業は、アフターコロナではプログラムごとに再検討し、オンラインや対面のそれぞれの良さを組み合わせ、多様な人が参加しやすいように事業を更新している。
- 区民むけに「子どもとメディア」テーマでの講演会を実施し、子育て家庭と共にメディアリテラシーについて学ぶ機会をもった。
- 利用者の情報入手の方法に合わせてホームページをリニューアルした。ひろばの混雑情報が一目でわかるように表示した。
- 子育て世代に利用が多いインスタグラムを活用し、プログラムの周知や報告、地域の場が再開する情報を掲載する等、情報発信の工夫をした。

### **2. 人や紙媒体を介して、情報を丁寧に伝える工夫を継続した**

- 「地域別子育て情報カレンダー」を毎年更新した。令和5年より「親と子のつどいの広場」3カ所、かなーちえサテライトと共に、7地区を分担作成し、各地域の施設や地域の活動が、日常で確認しやすくなった。妊娠期から学齢期以降へのつながりを重視したことで、子育てに関する情報が多岐にわたり、利用しやすいようレイアウトも変更している。
- 拠点に来所しない人に情報を伝える仕組みとして、区内各所に通信等を郵送する際に、防災情報紙を同封するなど、その時々に必要な情報が届くようにした。また、アウトリーチ事業を活用し、公園や共催事業等で幅広く情報収集・提供を続けた。
- コロナ禍で地域の居場所が閉館した折には、公園などを巡回して子育て家庭に寄り添い、町の掲示板に相談先などのメッセージを貼り出した。また区内47カ所のすくすくかめっ子に対して、無理のない活動継続や再開に向けて、対話や情報提供を重ねた。
- 利用者と丁寧に関わり、対面での情報の伝え方を工夫した。相談機関の情報を手に取りやすいよう、ひろば全体を使い、情報の掲示場所を適宜検討しながら、情報を配置した。
- 区との協働により、保育・教育コンシェルジュ、母子保健コーディネーターと日常的に連携した。こんにちは赤ちゃん訪問員の意見交換会への参加など、様々な区の事業と連携できることで、スムーズな情報の収集が可能となった。また、神奈川区保育所子育て支援連絡会や幼稚園協会行事に参加することで、新たなプログラムが創られたり、利用者の知りたい情報がリアルタイムに得られ、広場での情報提供に繋がっている。

### **3. 多様な利用者や担い手が情報収集や発信に積極的な関わった**

- 新設サテライトは近隣の利用者が多いため、当事者間での口コミ情報によるマップを常設するなど、地域情報交換のプログラムを年間を通して実施した。情報を入力に、交流が活発になり、人同士がつながるきっかけとなった。
- 複数の子育て当事者グループ、生涯学級グループと連携した事業を行うことで、様々な分野の情報発信が行われた。特に、若い世代の利用者発案により、口コミ情報の掲示や、新たな企画が行われ、生きた情報のやり取りが広がった。
- 当事者スタッフや地域活動グループ、多文化共生ラウンジが事業に関わることで、当事者ならではの多様性に対応した身近な情報が寄せられ、情報提供や発信が日常的に行われやすくなった。

**評価の理由(区)**

- ・令和5年度、地域子育て支援拠点に関するアンケートを実施し、子育て世代のニーズ把握と拠点との情報共有を行った。
- ・区で子育て応援マップを作成、HP上にもアップし、いつでも閲覧できるようにした。
- ・広報よこはま神奈川区版で毎月、拠点情報の掲載をし、拠点の周知をはかった。
- ・年6回発行の拠点通信を乳幼児健診、こんにちは赤ちゃん訪問、母子手帳交付、転入時に積極的配布、ニーズに合わせて広場事業や相談事業の案内をした。また第1子対象の赤ちゃん学級で保健師が毎回周知した。保育所申請窓口には配架した。
- ・こんにちは赤ちゃん訪問員研修や定例会、子育て支援者定例会で拠点と連携し拠点情報の周知を行った。
- ・地域の親子や支え手からの情報から地域別情報カレンダーを拠点が作成している。これらや口コミでの情報発信の仕方について、地域子育て支援拠点の定例会で意見交換したが、より効果的な情報発信について話し合いを深めていく必要がある。

**拠点事業としての成果と課題**

(成果)

- 「横浜市地域子育て支援拠点システムWEBサイト」のシステム構築や導入に伴い、年間を通して、他区拠点や市・区と話し合いを重ね、システム稼働へと進めた。
- ICT業務の増加に伴い、新たなスタッフ雇用、プロボノによるDX伴走、18区での勉強会など、対応を進めた。
- コロナ禍をきっかけに始まったオンライン事業は、大人数を対象とした情報事業で効果を発揮して定着、新たな利用層とつながる機会にもなっている。
- 利用率の高いSNSについて、利用者へのヒアリングや研修の機会を持ちながら、より子育て家庭に届くツールとして活用した。

(課題)

- 情報のキャッチされにくさに対して、より届きやすい情報発信を検討する。ホームページのリニューアルを進める。
- 横浜市子育て応援サイトとの連動など、情報収集発信の方法の変化が予想される。目的に応じた情報機能強化を進めるとともに、利用者にとってより使いやすく、届きやすい情報について18区と共に検討していく。
- 情報のデジタル化だけでなく、誰もが活用しやすい情報として、紙や対面による情報提供も引き続き工夫していく。

**振り返りの視点**

- ア 養育者や担い手が必要としている情報が何かをとらえ、区内の幅広い地域の子育てや子育て支援情報を収集・提供しているか。
- イ 来所が困難な養育者や担い手も含め、情報を入手しやすいよう、さまざまな媒体や拠点以外の場を通して情報発信しているか。
- ウ 利用者が情報を入手しやすく、自ら選べるひろば内の工夫をしているか。
- エ ネットワークを活かして情報を収集し、を養育者や担い手に提供しているか。
- オ 様々な子育て支援情報を拠点が集め、提供していることを広く区民に周知しているか。
- カ 養育者や担い手から拠点に情報が届けられる仕組みや工夫があるか。
- キ 情報収集・提供の企画に養育者や担い手が関わる仕組みや工夫があるか。

4 ネットワーク事業

目指す拠点の姿	(参考)3期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①地域の子育て支援活動を活性化するためのネットワークを構築・推進している。	<ul style="list-style-type: none"> <li>●信頼関係に基づく繋がりが、ネットワークの原点であることを根幹に置き、重層するネットワークの効果を、区や各所と共有しながら、地域づくりに結び付けていく。</li> <li>●常設の場とコーディネータースタッフの常駐という利点を生かし、各ネットワークの継続へ向けて、適正な役割を果たしながら、丁寧に働きかけ続ける。拠点においては、ニーズやトレンドにアンテナを立て、強い参加動機を吸引する実りある企画を生み出していく。</li> </ul>	A	B
②ネットワークを活かして、拠点利用者を地域へつないでいる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>●市民協働推進センター、18区拠点ネットワーク等と繋がり、分野を超えた市・区・企業・団体・NPO等からの情報や視座を得て、協働で地域づくりに取り組む。</li> </ul>	A	B

様式1-4 地域子育て支援拠点事業評価シート

評価の理由(法人)

(主なデータ)

■共催事業

(上段:回数/下段:人数)

	R3年度	R4年度	R5年度
地域ケアプラザ・ 地区センター	12 281	23 303	17 576
その他行政・民間	7 178	6 153	8 229
合計	19 459	19 456	25 805

■ちえのわタイム

(上段:回数/下段:人数)

	R3年度	R4年度	R5年度
音楽・おはなし会等	21 574	28 1,217	29 1,266
学習系	3 42	9 291	17 696
カラダ系・体験系	10 338	19 449	12 381
おもちゃ病院	8 124	10 121	12 193
合計	42 1,078	66 2,078	70 2,606

■ネットワーク交流会

	R3年度	R4年度	R5年度
テーマ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・プロジェクトマネジメント</li> <li>・子育て中の人の ネット ワーク交流会</li> <li>・外遊びネットワーク 交流会</li> <li>・ちらしづくり</li> <li>・カードゲームワーク</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・LGBTQ+</li> <li>・障がい啓発ワーク</li> <li>・プロジェクトマネジメント</li> <li>・ファシリテーション グラフィック</li> <li>・SNS発信</li> <li>・傾聴ワーク</li> <li>・外遊びネットワーク 交流会</li> <li>・子育て中の人の ネットワーク交流会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子育て中の人の ネットワーク交流会</li> <li>・ICT</li> <li>・子どもの居場所</li> <li>・プロジェクトマネジメント</li> <li>・住み開きみんなの居場所</li> <li>・不登校</li> <li>・ファシリテーション グラフィック</li> <li>・外遊びネットワーク 交流会</li> </ul>
開催回数	5	12	10
参加人数	115	253	248

■出席した主な会議

市民局広報審議委員会
神奈川区地域福祉保健計画策定委員会
児童虐待・DV防止連絡会
養育支援連携会議
区自立支援協議会子ども連絡会
こんにちは赤ちゃん訪問事業意見交換会
主任児童委員連絡会
施設間連携会議
保育所子育て支援連絡会

■療育おやこネットワーク

(人)

	R3年度	R4年度	R5年度
参加者数	72	74	115

## **1. 草の根ネットワークではじまった地域課題への取り組みが深まり、各ネットワークが団体として自立し事業化され、より広範囲に活動を広げた**

●療育おやこ自主ネットワークグループは、当事者・事業者・中間支援組織等多様なメンバーが拠点にて話し合いを定例で継続しており、社会的関心もここ数年高く毎回新たな参加者の広がりがある。その活動の柱である啓発ワークの実施は、小学校から専門学校、区社協での講座等その対象を広げ、さらに就労支援分野についての学びも行う等、活動年数を経るごとに活動内容が深まった。テーマ型のネットワークへの参画を通して、拠点として吸収できる情報・視座を運営に反映している。

●生涯学級や助成金等を活用し日本語教室や学習支援教室が区内に新たに立ち上がる等、地域における外国につながる人への取り組みが活性化、その動きに伴走した。そのネットワークを引き継ぐ形で、国際交流ラウンジ設立に向けて検討会が発足、令和5年度に「多文化共生ラウンジ」が開設した。区内在住の外国につながる親子が増えるにつれ、拠点ひろば来所も増えており、拠点の他機能と連動して、必要な情報や支援を届けた。

●区内47か所で開催する、すくすくかめっ子事業(神奈川区で地域の人たちがボランティアで集まり自治会町内会館等で開催している親子のたまり場。平成12年度に、神奈川区の区づくり推進事業として開始。神奈川区とかなーちえが共に打ち合わせを重ねながら実施している)が20周年を迎える時期に記念動画を区と作成し、その周知が進んだ。

次の25周年に向けて、さらにきめ細かく各かめっ子の課題等を吸い上げると共に、地域ぐるみの子育て支援の意義や関わる支え手の活動継続への動機を掘り起こす交流会の開催等、区と協働で取り組み育んできている。

## **2. 社会の変化にともなう新たな多様なつながりが生まれ、そのネットワークや活動を拠点事業に活かした**

●企業や民間団体からの社会貢献活動としての相談や、大学等からの連携依頼が向こうから舞い込むようになった。家庭に訪問する機会のある企業では拠点に集積される地域情報を届ける取り組みを提案した。大学との連携では、拠点についての研究調査に協力し、利用状況のデータや考察が還元された。さらに大学の知見を学び、拠点運営に活かす研修の開催にもつながった。

●関心や動機でつながる新たな地域活動が活発になる中、そうした活動者をゲストとして招き、地域情報のICT化、多世代の居場所づくり、不登校支援等の活動について学びあい、対話する交流会を開催した。

●旬なテーマをとりあげる市域ネットワーク団体に関わることで、変革期にある国や市の子育て施策について学ぶ重要な機会を確保した。また、ジェンダー分野について18区拠点スタッフ間で学ぶ機会に参加し、対話のツールについて理解を深めた。

●令和4年度より区政推進課との協働事業である地域づくり大学校事業を法人が受託開始したことで、拠点としても新たな地域活動者をつながり、地域力の創出という目的のもと、地域での父親学級の開催や地域情報の発信強化等、拠点事業との連携が生まれた。

## **3. 市域・区域において、さまざまな会議や連絡会に子育て支援分野として出席する機会を得、子育て家庭を取り巻く状況や当事者の声の発信を行った**

### **4. 区内各エリアにおいて中間支援組織としての役割が積み重ねられた**

●新たに立ち上がったサテライトにおいても、“地域とともに”を合言葉に、人や情報の行き来を通じて、地域の人材や近隣ケアプラザ・保育園等施設・機関と関係を築き、共催事業を重ねた。

●地域ケアプラザや地区センターとの年間を通して複数回開催する共催事業は、施設職員が代わっても変わらない事業として定着している。それぞれの地域特性に合ったテーマで企画した親子・地域向け事業をエリア開催した。

●地域ケアプラザエリアでの子育て支援に関わる人や団体を対象としたネットワーク構築が増えている。会議に参加するだけでなく、中核メンバーとしてそのネットワークの目指す姿について、区や区社会福祉協議会等、他の中間支援組織と話し合いを重ねた。

### **5. 開設17年、地域とともに育つ場という文化が継承されている**

●常設の居場所に地域の人や団体・グループが足を運ぶ事業(ちえのわタイム)を継続的に実施。地域活動が、利用者にとって身近に感じられ、また関心に応じて参加できるよう、多様な世代・分野の活動者を事業にコーディネートする取組を続けた。

●生涯学習グループや当事者ボランティアグループ、ネットワーク会議等の話し合いをひろばの中で行うことで、その存在を利用者親子に周知するとともに、関心を喚起し、活動に参加する契機を日常的につくった。

**評価の理由(区)**

・「神奈川区児童虐待・DV防止連絡会」(年2回)や主任児童委員会等、区役所が開催する関係機関の連絡会等に拠点職員の参加を調整し、顔の見える関係づくりに努めた。また、拠点職員から連絡会等の参加者に対して子育て世帯の現状を伝える機会をつくり、拠点の役割を理解してもらえるようにした。

・区と拠点で協力してかめっ子の交流会を企画したほか、地域や関連機関と拠点で取り組んでいる各種事業の活動状況を定例会で確認した。区職員が実際に活動に参加し状況を把握することで、拠点の役割をともに考えた。

・地区別子育てネットワーク連絡会が開催(コロナ禍後の再開を含む)された地域には、保健師も参加して、地域の課題を共有した。

・拠点が現在持っているネットワークが神奈川区全体の社会資源としてさらに広く活かされるよう話し合いの機会を持った。

**拠点事業としての成果と課題**

(成果)

●3年前には休止していたネットワーク会議や連絡会がこの3年で徐々に再開し、とまっていた地域活動もリ・スタートしている。コロナ禍以前から培ってきた関係性をもとに、地域へ出向くこと、拠点へ呼び込むことの双方向の行き来を通じて、新たな場や人とも積極的につながってきた。

●開設17年、拠点を知る人・団体、関わる人・団体が増え、向こうから連携の声がかかるようになっている。またコロナ禍で得たオンラインミーティング技術の存在は大きく、話し合いのハードルが下がり、意見交換の機会が多くもたれるようになった。

(課題)

●区域全体での子育て支援関係のネットワーク会議がコロナ禍後もたれていない。今後、区や区社会福祉協議会とともに、その必要性や役割を検討していく。

●少子化や就労世帯の増加等で拠点の利用者数が右肩あがりとはいかない社会状況において、拠点の役割として地域や多様な団体とつながることが、より一層求められていく。既存のネットワークだけでなく、企業や大学、さらにはNPO等と、双方の強みを生かした取組を協働の視点で探っていく。

**振り返りの視点**

- ア 地域の子育て支援関係者が、互いに知り合い、理解し、子育て家庭の状況及び子育て支援の情報や課題を共有するための場、機会をつくりだしているか。
- イ 地域の子育て支援関係者が協力し、支え合えるように、関係者同士をつないでいるか。
- ウ 子育て家庭や地域の子育て支援関係者のニーズを踏まえ、子育て支援分野に限らず、様々な社会資源と連携・協力した取組を実施しているか。
- エ 養育者や子育て支援活動に関心のある人を身近な地域の子育て支援の場や地域の活動につなげているか。

5 人材育成・活動支援事業

目指す拠点の姿	(参考)3期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①地域の子育て支援活動を活性化するため、担い手を支えることができている。	●妊娠期の父親を含め、ニーズに沿った企画を引き続き行い、地域での短い時間を濃密にする。	A	A
②養育者に対して地域活動の大切さを伝えるとともに、地域の子育て支援活動に関心のある人が、活動に参加するきっかけを作っている。	●シニア世代を子育て・地域支援へ繋げるため、地域をより身近に感じられるような企画を区民活動支援センター・地域振興課に働きかけ、きっかけづくりの講座開催を提案する。	A	A
③広く市民に対して、子育て家庭を温かく見守る地域全体での雰囲気づくりに取り組んでいる。	●かめっ子の支え手の高齢化に伴い、今後支え手が交代する地区が増えることを視野に入れ、支え手のモチベーションを保ちながら、支援していく。	A	A
④これから子育て当事者となる市民に対して、子育てについて考え、学び合えるように働きかけている。	●区と共に、外遊び活動支援事業の在り方を、今までの活動を活かしつつ、今後も持続するための仕組みを検討する。	A	A
☆すくすくかめっ子事業・親子のたまり場、個性ある区づくり推進費における事業等と緊密な連携をとり活動を支援する。	●利用者が地域活動の経験を活かした仕事に就く事例が増えた。地域で子育てをしながら働ける場に繋げていきたい。 ●横浜市版子育て世代包括支援センターと連携し、妊娠期の人たちへの支援を広げていく。 ●コロナ禍にあり、対面・繋がりの場の継続への支援、オンラインを活用した各種講座開催等を構築する。	A	A



評価の理由(法人)

(主なデータ)

■ ボランティア受け入れ数

	R3年度	R4年度	R5年度
学生ボラ	2	62	69
地域ボラ	147	418	682
学生実習※	28	52	108

■ 外遊び応援隊開催日数

	R3年度	R4年度	R5年度
回数	27	39	39
参加人数	514	1,063	1,084

■ ハマハグ

	R3-R5年度
関わった地域グループ	17団体
新規加盟店	61店舗

※看護師・社会福祉士・保育士・保健師・通信制高校

■ 利用者企画、利用者講師

	R3年度	R4年度	R5年度
事業数	7	11	12

■ 子育て中の人のネットワーク交流会

	R3-R5年度
回数	8
参加人数	90

■ 中学高校への出張授業

	R4-R5年度
クラス数	17
人数	1,265

■ ゆう♡ゆうバトン幼稚園選び  
100人いれば100通り

	R3年度	R4年度	R5年度
開催回数	3	3	3
参加人数	157	210	190

## 1 現代の子育ち・子育てを様々な世代の力を借りて支えていく取り組み

- コロナ禍を経て、ボランティアの受け入れを広く行った。広報誌掲載やシニアボランティアポイント制度への加入で、シニア層がひろばに足を運ぶきっかけを作り、ボランティアが増加した。小学生親子が拠点でボランティアをする仕組みを作り、利用者が子どもの成長の道筋を感じる機会を作った。また、学生の実習を積極的に受け入れた。利用者が拠点に通う期間が短くなっている中、拠点が様々な年代の交流の場になっている。
- 区との共催事業のすくすくかめっ子事業では、既存47か所の活動を丁寧支えた。支え手と共に日頃の活動を盛り上げ、困りごとがあるかめっ子には区と相談し、法人の相談員が訪問した。また支え手同士の学びあいのため、交流会や研修会を行い、季刊誌を発行した。20周年には記念動画を作成・配信し、市民に広く活動を周知した。

## 2 利用者が新たな担い手として活動できる環境づくり

- ひろば利用者から、新たな事業の企画立案や講師を務める人材が出てきた。「パパトーク」の参加者がファシリテーターとしてトークを引っ張り、人材の循環が生まれている。父親自身が講師として「パパ講座」を開催したり、「みち・すきま遊び」を企画し、土曜日に外遊びを仕掛けるなど、活動の幅が広がっている。
- 子育てをしながら地域活動やグループ活動をしている人や、地域活動に興味がある人たちのために、「子育て中の人のネットワーク交流会」を実施し、講師を招き、学びあいの機会を持った。
- 当事者ボランティアグループ「ゆう⇄ゆうバトン」(区内の幼稚園に通う子どもの保護者や先輩父・母がボランティアで活動しているグループ)が就園前の親に向けて行っている幼稚園トーク「幼稚園選び100人いれば100通り」は、毎年メンバーが入れ替わりながら、活動を継続している。ひろばで行う企画会議の様子を見て、子育て中でも何かやってみたくと利用者がメンバーに加わるなど、地域活動を始める機会になっている。
- 地域振興課の地域づくり事業に応募し、地域デビュー講座を行った。講座のパッケージを作成し、地域ケアプラザの事業立ち上げにつながった。また法人で地域づくり大学校を受託し、拠点で卒業生が事業をするなど、人材育成につながっている。

## 3、子育て家庭を温かく見守る環境整備と子育て家庭への理解の周知

- 幅広い会議、連絡会に参画し、今の子育て家庭の現状を発信し、施策に反映されるよう努めた。
- 地域で活動するグループが、市子育て家庭応援事業ハマハグに拠点とともに取り組んだ。ハマハグ加盟店が増え子育て家庭を応援する環境が広がり、地域グループは活動継続の運営資金を得、地域とのつながりを深めた。
- 地域活動をしている人を講師として招き、利用者へは地域活動の紹介、講師には子育ての現状や様子を見てもらう機会を作った。

## 4.次世代の人材育成

- 中学校2校、高校1校(3拠点合同)で出張授業を行った。地域と共に企画し作ってきた親子ふれあい授業では、利用者親子と学生が交流をし、学生が家庭を持つことを具体的にイメージしたり、父親がふれあい授業に出向き学生と話すことで、父親の家事育児の取り組みについて、次世代に伝えることができた。親世代も、次世代育成に関わり、自分の経験が誰かの役に立つことで自己有用感が高まり、加えて地域に目を向ける契機になった。

## 5. 外遊び活動支援

- 区との共催事業から拠点独自の事業に移行し、日曜開催や学童期対象のプログラムなど、新たな取り組みが地域で始まった。
- サテライトができ、新たな地域とのつながりから、外遊び応援隊(親子で外あそびをたくさん経験してきた子育ての先輩たちが、「外遊びの楽しさをもっと共有したい」、「子育て中のあれこれを一緒に考えたい」と活動しているボランティアグループ。平成8年に、「神奈川区子育て支援事業・仲間と楽しく子育て どんこ遊び」がきっかけとなって結成。)が新規に1か所立ち上がった。
- 外遊び応援隊4か所の活動に丁寧に寄り添い、活動継続の伴走をした。年間を通しての定例会と、外遊びに関わる人たちのネットワーク交流会を設け、新たな人材を迎え入れた。

**評価の理由(区)**

- ・かめっ子交流会を区と拠点で共同開催、全体交流会、方面別交流会、講演会と地域のひろば(かめっ子)の支え手を支えた。
- ・元利用者が次世代を担っていく過程や育成についても共有した。
- ・各地区のかめっ子にも区職員が出向き、かめっ子の課題をつかむようにした。
- ・養育支援連携会議(各年6地区)を開催し、拠点スタッフが地域関係者ととも現在の子育ての課題、虐待、通告などを学ぶ機会を設けた。
- ・拠点が行うネットワーク交流事業(子育てサークルやプレイパーク、外遊び事業)に参加し、後方支援した。

**拠点事業としての成果と課題**

(成果)

- 小学生からシニア世代まで拠点に足を運ぶ仕組みを作り、切れ目のない人材育成のしかけができている。
- すくすくかめっ子事業はコロナ禍で活動を休止したが、その間も丁寧に伴走し、全てのかめっ子会場の活動再開につながり、親子の交流の場、地域活動の場として良さを再確認できた。
- サテライトが開設し、新しい地域とのつながりが、ボランティア増や地域での共催事業となり、地域活動の広がりにもなった。

(課題)

- 拠点での経験が社会で活かした事例が出ている。地域を知り、主体的に関わる良さを利用者に伝えていく仕組みづくりを考える。
- 地域で過ごす時間が短くなっている。その中で、子育てをしながら地域活動をする、またはいつか地域に戻って活動をする仕組み作りを検討する。
- 子どもが育つ環境への働きかけとして、子育て家庭だけでなく、周囲の大人へに対して、外遊びの魅力をより丁寧に伝えていく。外に家族で出かけるきっかけづくりを行っていく。

**振り返りの視点**

- ア 地域で子育て支援に関わる人が増えているか。かつ新たな担い手を発掘・養成する取組がなされているか。
- イ 子育て家庭や担い手のニーズを踏まえ、活動意欲の向上やスキルアップにつながる取組がなされているか。
- ウ 地域の子育て支援活動がより充実されるよう、必要に応じて新たな活動希望者を結び付けているか。
- エ 養育者が地域を身近に感じ、地域の活動に関心を持てるように働きかけているか。
- オ 活動希望を丁寧に受け止め、拠点内の活動や身近な子育て支援活動等に結び付けているか。
- カ 子育ての現状や子育て支援の必要性を周知・啓発しているか。
- キ 子育て家庭(妊娠期の方を含む)を温かく見る気持ちを持つことができるように働きかけているか。
- ク これから子育て当事者となる市民と子育て中の親子がふれあい、学び合う機会や場を作っているか。

6 横浜子育てサポートシステム区支部事務局運営事業

目指す拠点の姿	(参考)2期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①子育てサポートシステムに、多くの区民の参画が得られている。	<ul style="list-style-type: none"> <li>●就労家庭が増加し、保育園や習い事送迎の依頼が全体の50%近くある中、提供会員数の減少は課題である。</li> <li>●提供会員を増やす取り組みとして、退職後のシニア世代を対象とした、地域振興課生涯学習講座との共催や、横浜市シニアボランティア説明会の拠点開催、自治会町内会単位での横浜子育てサポートシステム導入等、新たな切り口を検討していく。</li> <li>●コーディネーター自身がスーパーバイズを受ける体制を整える必要がある。</li> </ul>	B	A
②養育者にとって、必要な時に利用しやすい事業となっている。		A	A
③会員が地域の支え合いの良さ、大切さを理解しながら、利用や活動を継続できるように、支えることが出来ている。		A	B
④養育者の利用相談内容に応じて、子育て相談や他機関等の情報を提供し、必要な支援につなげている。		A	A

評価の理由(法人)

(主なデータ)

■会員数 (人)

	R3年度	R4年度	R5年度
利用会員	657	853	878
提供会員	121	140	138
両方会員	54	50	55
合計(年間)	832	1,043	1,071

■入会説明会 (上段:回数/下段:人数)

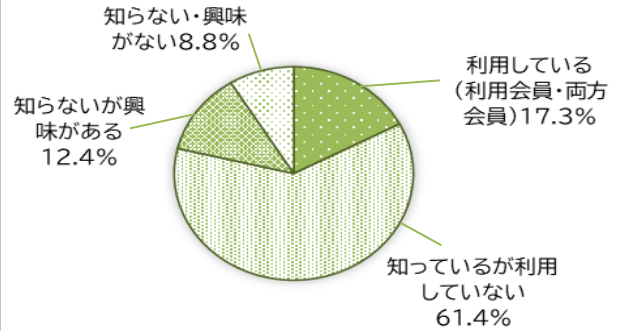
	R3年度	R4年度	R5年度
集団	24 125	26 145	32 253
個別	109 111	103 106	63 85
出張	13 53	12 36	19 111

■援助実績

	R3年度	R4年度	R5年度
調整数	452	535	752
コーディネート数	219	247	331
事前打ち合わせ件数	143	199	281
ひろば預かり件数	201	258	392
援助活動報告書件数	3,517	2,797	3,938
実働数(月平均)	23.3	24.5	31.6

■令和5年度 神奈川区実施  
「かなーちえ」に関するアンケートより (回答619件)

Q.14 横浜子育てサポートシステム(地域での子どもの預かり合い)についてお聞きます



### 1.コロナ禍とアフターコロナでのサポートニーズの高まりの中で、活動継続の取組と、安心なサポート支援を行った

- コロナ禍において、安心安全な預かりの場のニーズが高まる中、会員宅ではなく、拠点やサテライトでの預かりを紹介し、サポートに繋がった。
- 長期化するコロナ禍の影響によるものと思われる依頼：里帰り出産ができない、遠方の親族が手伝いに来れない等の理由での産前産後の預かりや園の送迎、保護者の通院時の預かり、保育園等が休園になり、保護者の在宅ワーク中の預かり(養育者のリフレッシュ含む)等が増加。コロナ禍で提供会員も自粛傾向にあったが、利用会員から頻度や預かり場所等、丁寧な聞き取りを行うことで、提供会員の気持ちも尊重し、サポートに負担を感じないよう努めた。
- 感染拡大予防対策のため、集団説明会をひろば利用時間以外に、閉館後の夕方にも開催することでより参加しやすくなるよう工夫した。また、集団に不安を抱える方や子連れ希望の参加者には個別で対応することで、横浜子育てサポートシステムの仕組みや主旨を丁寧に伝えることができた。

### 2.組織変革によって、拠点の事務局機能が強化された

- 本部移管に伴い、会員管理や更新処理の作業が本格化し、全区共通ルールの基、区支部内でも工夫し、個人情報取扱いを更に意識した管理を行った。
- 全会員へ「安全に活動していただくための留意点について」「活動時の個人情報の取扱いについてのお願い」を配布し、改めて安心・安全に活動していただくための注意喚起を行った。
- 活動中の災害等緊急時に備え、会員同士の連絡手段が途絶えた時、どのように避難するか、避難場所の確認も事前打ち合わせ時に行うことで、会員同士、安心・安全を意識した活動へとつなげた。
- 会員へWeb登録を周知することで、年度更新処理をスムーズに行うことができた。

### 3.会員一人一人の依頼や活動に、丁寧に寄り添ったコーディネートを行った

- 援助活動報告書の提出で来所される提供・両方会員と活動に対する不安や要望がないか、また、対策を一緒に考えることができた。
- 特別な配慮を必要とする家庭へは、区と連携のうえ、提供会員の意向を確認し、利用・提供・コーディネーター等で話し合いの機会を持ち、サポートに繋げることができた。
- 習い事の送迎や福利厚生制度利用で、連日や長期に渡るサポート依頼が増加し、提供会員の支え合いの気持ちとはすぐわかない依頼になり、引き受ける会員が減少傾向。入会説明会や依頼聞き取り時には、「提供会員は、有償の支え合い活動でありボランティアの気持ちで活動している」ことを常に伝えた。
- 拠点やサテライトでのサポート時に、提供・両方会員は、会員証の入った共通のホルダーを携帯してもらうことで、ひろば利用者にもサポートの様子を知ってもらう機会になった。

### 4.サテライトひろば新設や事業の整備によって増加したコーディネートやサポート依頼に各所と連携しながら対応した

- 令和5年7月からの新規事業に伴い、利用・両方会員へは利用料の変更、対象となる家庭には「子サポdeあずかりおためし券」発行の案内を行った。更に、提供・両方会員へは活動報告書の記入変更、給付金請求等について、説明会を複数回開催した。
- 「ひとり親家庭等支援事業」の対象事業となり利用層の幅が広がった。
- 外国籍の子育て家庭が横浜子育てサポートシステムを利用する機会が増え、関係機関との連携を取りながらサポートに繋げることができた。
- サテライトの開所により、より身近な場所での預かりを希望する人が増えた。

**評価の理由(区)**

- ・拠点システムの導入や提供会員の研修方法の変更等について、常に拠点と情報を共有し従来の仕組みからの移行がスムーズに行えるよう、会員や利用を希望する人に丁寧に案内した。
- ・新規に始まった「子サポdeあずかりおためし券」の情報も含め母子手帳交付、出生届提出、各種訪問、こんにちは赤ちゃん訪問、赤ちゃん学級、乳幼児健診などで子育てサポートシステムについて対象者に丁寧に説明した。
- ・特に必要な場合はコーディネーターと事前に情報共有を行ったり、利用者説明会へ区職員が同行した。
- ・定例会議・スタッフ会議や子育てサポートシステム事業の振り返り(年2回)を活用し、多岐にわたるニーズにどのように対応していくか話し合ったり、ケース対応について助言した。
- ・利用会員の増加、相談ニーズの多様化に対応できるよう、提供会員の登録拡大に向け、こんにちは赤ちゃん訪問員の定例会議等を活用し事業の周知をした。
- ・広報の活用等有効なPR方法や提供会員の登録拡大に向けて取り組めることを話し合い、検討した。

**拠点事業としての成果と課題**

(成果)

- コロナ禍、アフターコロナでのサポートへの対応に、拠点機能と共に取組み、事業を継続した。
- 会員の気持ちに寄り添いながら丁寧な聞き取りをし、きめ細やかなコーディネートを行った。
- 新しいシステム導入にむけて18区共に検討と準備を重ねた。会員への周知や個別対応を丁寧に行い、システム移行を進めた。
- 新規事業や新しいシステムによって、より利用がしやすくなり依頼が増えると共に、コーディネート機能の強化が必要となった。常勤1名を増員し対応することで、ひろばの利用層とは異なる層への支援を続けることができた。

(課題)

- 利用会員の増加に対して、提供会員の不足が著しく、新たな会員の発掘が急務となっている。関係機関と連携を取りながら、効果的な周知活動を探っていく。
- 難しい援助依頼や、会員への対応が増える中、コーディネーター自身のケアが必要である。フォローアップ研修等に積極的に参加していく。

**振り返りの視点**

- ア 区民に対して、子育てサポートシステムについての周知活動を行っているか。
- イ 提供会員数拡大に向けた取組がなされているか。
- ウ 就労に関する以外の養育者のリフレッシュ等の理由での利用を含め、利用したい人が利用に結びつくための工夫をしているか。
- エ 会員が相互の合意のもとに安心安全な活動できるよう、丁寧なコーディネートができているか。
- オ 会員の声の把握に努め、必要に応じて活動内容の調整や追加のフォロー等を行っているか。
- カ 活動における事故防止のための講習、個人情報取扱いに関する注意喚起など、会員への安全対策をはかっているか。
- キ 提供・両方会員が安心・安全な活動を継続して行えるよう研修会等の取組がなされているか。
- ク 会員が活動の意義を感じられ、会員間の親睦を深め信頼関係の構築のため、会員間の交流をはかる取組がなされているか。
- ケ 援助活動の調整時や会員の声から把握した子育てのニーズを地域子育て支援拠点としての事業に活かしているか(新たな事業の実施や事業の見直しなど)
- コ 利用相談の内容に応じて、子育てサポートシステム以外のサービス等の情報提供や関係機関に適切につないでいるか。
- サ 専門対応が必要と考えられる相談については、専門機関に適切につないでいるか。

7 利用者支援事業

目指す拠点の姿	(参考)2期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①拠点における利用者支援事業が、区民や関係機関に広く認知されている。	●横浜市版子育て世代包括支援センター実践に向けて、地域との連携を視野に入れたセンター機能の展開を検討していく。	B	A
②相談者に寄り添い主体性を尊重しながら、個別相談に応じ、適切な支援を行っている。	●毎年更新している「子育て期の情報お役立ちファイル」の活用について、継続して伝えていく。インターネット等での効果的な情報発信を進めていくと共に、情報を手渡しする意義について、当事者や支援者と共に学んでいく。	A	A
③子育て家庭を支えるためのネットワークの一員として、包括的な視点を持って子ども・子育て支援に関する関係機関や地域の社会資源との協働の関係づくりを行っている。	●拠点サテライトの開設により、利用者支援事業が区内2か所で実施される。サテライト地域でのネットワーク強化、2か所の連携等、新たな体制での事業の在り方を検討する。	A	B



評価の理由(法人)

(主なデータ)

■令和5年度相談内容 (%)

	東神奈川	サテライト
子どもの健康	2.1	0.3
子どもの生活	7.6	23.9
子どもの発育・発達	10	8.1
子どものしつけ	4.3	0.6
地域情報	7	4.7
親自身	18.5	30.2
親の仕事	2.7	5.5
子どもと家庭	10.3	8.3
就園・就学	17.3	13.1
制度・サービス	15.2	4.3
親の介護	3.3	0.1
その他の介護	0.6	0
経済問題	0.3	0.9
その他	0.6	0.1

■小学生以上の相談 (%)

	R4年度	R5年度
東神奈川	14.8	6.2

■マタニティからの相談 (%)

	R3年度	R4年度	R5年度
東神奈川	1.2%	3.9	7.1

■令和5年度 相談のきっかけ (%)

	東神奈川	サテライト
自拠点からの紹介	22.3	36
関係者からの紹介	12.3	4.4
拠点内巡回	34.6	28
地域活動	3.8	1.1
広報・チラシを見て	4.7	2.2
相談継続	16.1	28
その他	6.2	0.3

■出席した主な会議・連絡会

- 区地域自立支援協議会
- 区児童虐待DV防止連絡会
- 各地区養育支援連携会議
- 区地域施設間連携会議
- 区主任児童委員連絡会
- 区地域ケアプラザ
- 地域活動交流コーディネーター連絡会
- 区小・中学校校長会
- 区保育所子育て支援連絡会
- 市幼稚園協会神奈川支部連絡会
- すくすくかめっ子交流会・研修会
- 地域ケアプラザ子育て広場運営協議会

■担当事業

- シングル親&ステップファミリートーク
- ダブルケアカフェ
- 多文化おしゃべり会
- 保育・教育コンシェルジュと話そう  
保育のお話基本のキ
- 私流幼稚園選び100人いれば100通り!
- 女性の悩みなんでも相談
- ワーキング親トーク
- マザーズハローワーク出張相談
- マタニティプログラム エア沐浴体験

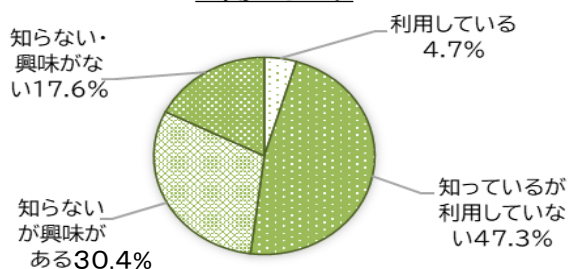
■出張・訪問先

- 区 土曜両親教室
- 親と子のつどいの広場 ママといっしょ!
- 親と子のつどいの広場 しゅーくるーむ
- 親と子のつどいの広場 ほしのひろば
- 六角橋地域ケアプラザ子育て広場
- 育児支援センター園 松見保育園
- 育児講座・園庭解放
- すくすくかめっ子 親子のたまり場
- 神奈川区日本語教室の会ちゅうりっぷ
- 外遊び応援隊
- 白幡の森プレイパーク
- 孝道山子育て支援ふれあい広場 ひだまり
- 多世代の居場所 てんこもりのわ
- 多世代の居場所 子安の丘みんなの家
- 六角橋フードパントリー

■令和5年度 神奈川区実施

「かなーちえ」に関するアンケートより (回答619件)

Q.15 横浜子育てパートナーについて  
お聞きします



**1. 拠点のネットワークを活かした多様な地域資源とのつながり、事業の周知と地域の子育て支援の充実に向けた働きかけ**

- コロナ禍を経て、子育て家庭の孤立感、不安感が増し、周囲とのつながりも作りにくい状況の中、改めてそのニーズを捉えるよう努め、相談者の自己決定を大切にした対応を行なった。子育て家庭の行動が制限され、より身近な地域での支援の重要性が増したことも踏まえ、様々な地域の中に出向く機会を広げ、拠点に出向かない親子や学齢期等も含め相談に応じ、地域との連携を深めた。
- 新たに立ち上がる地域の活動、休止後再開した活動等の情報が拠点に寄せられ、その活動継続に伴走し、地域資源としてのつなぎ先が広がった。
- 離婚、ひとり親、面会交流、外国籍等、多様なニーズの相談が増加した。関係機関との連携や情報収集、研修への参加等を行い、対応に反映させた。

**2. 共催事業を通じた子育て家庭の課題に対するアプローチの検討と広がり**

- 保育教育コンシェルジュや地域包括支援センターとの共催事業は、社会状況の変化に合わせて実施方法や内容を工夫し継続した。その中でオンライン事業が定着し、拠点未利用者の参加のきっかけともなり、対面の相談や拠点来所に繋がることも増えた。
- 子育て家庭のニーズの変化に合わせて共催先とともに検討を重ねたことが、双方の相談対応や情報発信方法の充実につながった。共催事業を通して、課題の認知、利用者支援事業の周知が進んだ。
- 共催事業を通して連携が深まり、関係機関から利用者支援につながることも出てきた。
- 「外国につながる親子のための地域情報」ファイルは、外国籍親子の支援に取り組んでいる地域グループと意見交換し、より使いやすい情報を厳選した改訂版を作成、区内全公立小中学校に配布、年度の更新をしてきた。区内に多文化共生ラウンジが開所されたことに伴い更新を引き継ぎ、情報交換等で連携した。

**3. 多機能型拠点事業と連動した対応**

- サテライトで利用者支援事業がスタートし、それぞれの特性や強みを活かした取り組みを検討、実施した。双方で見守る家庭も出てくるなど、区内の利用者支援事業が充実してきた。
- 利用者支援専門員が直接対応するだけでなく、ひろばの相談対応を共有し、共に検討を行うことで、拠点全体で見守る体制が強化された。
- 利用者支援事業から子育てサポートシステムにつなぎ双方で見守る例、子育てサポートシステムを入り口に利用者支援に繋がる例があった。また、日頃から気になる事例を共有していることが対応に活きた。

**4. 区と連携した切れ目のない支援への取り組み**

- 区の保健師、助産師、こども家庭支援員、母子保健コーディネーター等と連携し、さまざまな課題を抱える家庭と多角的に関わる一端を担った。
- 子育て世代包括支援センターの一翼として、妊娠中から子育て期の切れ目のない支援に取り組んだ。妊娠期から地域に繋がることを念頭に、拠点スタッフと共に検討を重ね、地域の助産師を招いたマタニティ向けプログラムを実施した。訪問型産後母子ケア事業や産後の拠点プログラムなどにつながる効果が得られた。

## 様式1-7 地域子育て支援拠点事業評価シート

### 評価の理由(区)

- ・養育支援連携会議やこんにちは赤ちゃん訪問員連絡会など区が主催の会議を活用し、利用者支援事業の説明、周知をはかった。
- ・スタッフ会議や年3回の振り返りで出されるケース対応について、適切な専門家につなげたか、情報提供することの同意がとれたか、個人情報の適切な取り扱いができたかの確認を行い、支援内容、方法をともに精査し、助言した。
- ・区の養育支援連携会議への参加を依頼し、地域の子育て支援関係者への周知や連携を意識して行った。
- ・子育て世代包括支援センターとして区と拠点の情報交換の場を設定、会議を再開し、意見交換した。

### 拠点事業としての成果と課題

#### (成果)

- 拠点の中で利用者支援事業が定着し、拠点機能の充実につながった。
- フォーマル・インフォーマル多方面のさまざまな機関と連携することで、家庭に関わる起点として機能してきている。
- ダブルケアの共催事業など、分野を超えた機関に理解を広げた。コロナ禍でも活動を継続し、つながりが広がった。
- 子育て世代包括支援センターとして、区と拠点がそれぞれが捉えている状況を共有、丁寧に検討しながら、妊娠期からの切れ目のない支援にとともに取り組んだ。

#### (課題)

- 区実施のかなーちえに関するアンケート結果で「利用者支援事業を知らないが興味がある」30.4%。事業の認知度を上げ、潜在的なニーズを利用につなげるための展開を検討する。
- 情報の整理や発信について、より届きやすい方法を検討、実施する。
- 多分野にまたがる課題について、区と協力しながら理解を進める。

### 振り返りの視点

- ア 利用者支援事業を幅広く区民や関係機関に周知しているか。
- イ 養育者に対して、気軽に相談しやすい仕組みづくりや工夫をしているか。
- ウ 最新の情報を収集し、活用できるよう工夫しているか。
- エ 相談に対しては、傾聴に努め、ニーズを把握して対応しているか。
- オ 拠点内でパートナーの役割を理解し、日頃から相談者を拠点内でつなぎ合うことについて、お互いの役割分担を明確にしたうえで、相談対応・利用支援を行っているか。相談者の相談内容に応じて継続対応やつなぐ必要性を判断し、対応しているか。
- カ 専門的な対応を要する相談に対して、相談内容と相談者のニーズを踏まえ、速やかに関係機関への紹介・仲介・支援依頼を行うなど、適切な対応をとっているか。
- キ 拠点内連携、関係機関への紹介・仲介後も必要に応じて役割分担を確認しながら、フォローをしているか。
- ク 相談の対応状況や支援の適切さ、拠点内外での連携状況等について、多角的な視点で振り返りや検討を行っているか。
- ケ 利用者支援事業の周知や個別相談等の取組を通じて、支援につながる新たなネットワークの構築を行っているか。
- コ 拠点のネットワークを活用し、関係機関や地域の社会資源との関係づくり・関係強化を行っているか。
- サ 把握した課題を関係機関等と共有し、拠点事業の充実、必要な支援の調整や見直し、不足する資源の調整、提案や新たな創出につなげているか。